



石川町では職員5人で 400人の町民に対応

みずの しゅういち
水野 秀一 さん
(広野町職員(当時))

東日本大震災が発生した当時は広野町の職員で、最初の地震があった平成23年3月11日も執務中でしたが、役場庁舎の破損は、天井や壁など何か所かにとどまりました。いったん自宅に帰り家族の無事は確認しましたが、町の災害対策本部ができたのですぐ役場に呼び戻されました。その日は役場に寝泊まりして待機し、翌12日の夕方に福島第一原発が爆発したから石川町へ避難するよう指示があり、避難者の誘導とお世話をするため、大型バスと一緒に石川町総合体育館に向かいました。

着いたのは夜でしたが、石川町の副町長が出迎えてくれ、翌日から石川町の人々が炊き出しをしてくれました。体育館には、マイカーで避難してきた人もいて最高で400人くらいいました。それに対して町職員は5人で、とても対応不可能です。石川町の町長、副町長に手を貸してほしいとお願いしたら、石川町の職員で5、6人の班を作って寝泊まりしてくれました。

3月27日に水戸の長姉が亡くなり、服がないので作業服で水戸へ行きました。埼

玉の次姉の意向で、認知症の母は埼玉県の三郷市に避難しましたが、症状が進行しました。町は4月18日にいわき市湯本にある会社の事務所を借りて支所を開くことになったので、私は、4月16日に石川町を出て18日からは湯本の旅館から通いました。5月23日に母がいわき市のスパリゾートハワイアンズに移り、私も合流しましたが、8月にスパリゾートハワイアンズを出ることになりました。病院や介護施設など母の行き場所を探しましたが、空いているところは高額で、やむを得ず8月末日で早期退職して広野の自宅で在宅介護を始めました。

介護施設のデイサービスやショートステイを頼んだら、広野町は放射線量が高いのでこちらで送迎するように言われました。でも私が送迎すると90歳近い母がどこかに連れていかれると泣くので、再度施設に依頼して送迎してもらうようにしました。

いわき市の介護施設が平成24年6月に母を特別入所させてくれるまで、母の介護は1年4か月に及びました。



復興の足かせにならないよう、 全力で水道の復旧をした

みはし ひろし
三橋 博 さん

(双葉地方水道企業団 総務課長補佐(当時))

平成23年3月11日は、楢葉町にある管理本館で被災しました。進入路などは崩壊しましたが、阪神淡路大震災後に建てた管理本館は建物自体には被害がなく、ロビーに災害対策本部を設置し、被災状況の確認を指示しました。広野町の被害状況については、広野工業団地や海側で数か所水が吹き出しているところが目視できたので、バルブ操作で止水しました。翌12日、楢葉町も国からの避難指示が出たため、広野町の小滝平浄水場に災害対策本部を移し、給水車2台を使って広野町内で給水活動をしましたが、午後3時に広野町役場から避難指示があり、いわき市へ避難しました。広野町から残っている町民のために、役場職員による小滝平浄水場の運転を認めてほしいと依頼があり、許可するとともに企業団の職員も数人残しました。

広野工業団地内の製薬会社から、「水がないと原材料が化学反応するおそれがあるので、給水してほしい」との依頼を受け、4月10日に小滝平浄水場からの上水道を

工業用水と兼ねて復旧させました。また、内閣府から東京電力(株)広野火力発電所への通水を依頼され、工業用水を3日間で小山浄水場からヴィラ岩沢付近の6号国道まで復旧、数日後には東京電力(株)広野火力発電所への通水を確認しました。広野町は屋内退避指示から緊急時避難準備区域に指定されましたが、水道復旧の遅れが原因で復興の足かせになってはいけないと思い、企業長と広野町長から許可をもらい積極的に水道復旧作業を進めました。6月ころには浄化槽を使用されている区域内には通水できましたが、下水浄化センターが津波被害の影響もあり、公共下水道の区域には通水しませんでした。また、自衛隊、復旧工事業者さんの求めに応じ、消火栓から給水できる施設を設置しました。

現在、広野町に給水している水道水は、毎日放射性物質の測定をしていますが、全て検出限界値(1Bq/ℓ)未満です。水道水の安全性は確保されていますので、広野町の皆さまにはどうぞ安心して飲んでいただきたいと思います。



消防団で避難中の町を パトロールした

や ない みつ まさ
矢内 光正 さん
(広野町消防団副団長(当時))

最初の地震が来た時、かなり強く長い揺れで、松の枝が横ではなく縦に揺れました。

このままどうなってしまうのか、恐怖そのものでした。道路が地割れしたことを知らされ、すぐテレビをつけてみて、とんでもないことになると思い、役場に連絡を取ろうとしても電話が通じませんでした。

当時の消防団長にも連絡が取れなかったもので、すぐ消防団の作業服に着替えて役場に行きました。町長室から海岸をみたところ、2波目の津波が防波堤に打ち当たって、松林を超えてきて、とにかく言葉にはならない状況でした。道路が寸断されたということもあり、かなりざわめいていました。町長や消防団長と相談して、まず避難してくる人の受け入れ態勢を整えようと、役場周辺の公共施設に避難させることになりました。どこに行ったらいいのか分からない人が多く、夕方からは町のマイクロバスを出して、避難所に移送しました。

広野町では、津波で3人が行方不明になりましたが、翌12日と翌々日の13日に1人ずつ遺体が見つかりました。残りの1人

は、海岸線を中心に、消防団でかなり捜索したのですが、見つかりませんでした。

ご家族には気の毒でしたが、当時は避難した消防団員もいて、捜索に当たる団員の確保もなかなか容易ではありませんでした。

14日に町が役場ごと小野町に避難すると、消防団も行動を共にしました。小野町にお世話になって3、4日目に、広野町が全世帯避難しているすきに、空き巣が入ったと一報がありました。消防団長と相談して、消防団が昼夜1日交代で警戒に当たることにしました。各分団交代で、11月いっぱいまで続けました。空き巣は、1か月過ぎないうちに5、6件は報告が上がってきましたが、いくらかでもパトロールの効果はあったと思います。当時、夜警をしながら歩いたとき、避難しなかった地区に明かりがついていたことがありました。

多分家族全員ではないと思いますが、残りのほとんどの地区に明かりはついていませんでしたので、とても印象的でした。今でも遠方に避難したため、戻ってこられない消防団員もいます。



小野町の避難所から広野町へ 毎日通った

よしだ しげみつ
吉田 重光 さん
(水道・下水道管工事業者)

震災時のことは、私自身はあまり覚えていません。昔から双葉地方水道企業団の仕事を請け負っていたので、家に帰ってから、漏水箇所、断水させる場所を企業団と話し、止めるところは止め、足りないところはパックで配り、その作業を11日の午後から14日の午前中までしていました。ところが、14日に福島第一原発の3号機が水素爆発し、企業団そのものが避難しましたので、広野町役場に出向き、これからどうするのかを聞きました。ほかの家族はいわき市に避難しましたが、私と息子は11日から13日までは広野町に泊まり、広野町消防団の活動に参加していました。14日の昼から町ぐるみで小野町に避難することになり、作業用の車に乗っていきましたが、小野町の避難所はいっぱいだったのでその晩と15日は車中に泊まりました。ガソリンがないため暖房はかけられませんでした。

17日に東芝の災害対策本部が二ツ沼公園にできました。ライフラインが痛んでいるのでそこへ行ってほしいと依頼を受け、タイベックスーツとヘルメット、マスク、長靴で対策本部に行きましたが、鍵を持っ

ている人が避難していたため入れませんでした。窓ガラスを切り抜いて、とりあえず入りました。ボイラー室も鍵がかかっていましたが、漏水していたので扉を破り応急処置をしました。小野町の避難所に帰ったのが午後11時ごろでした。

18日に放射線量を確認しにいくことになり、私と設計屋さん1人と町の職員3人で広野町に入り、何十か所もの線量を測りました。線量が一番高かったのは広野町工業団地の近くのアスファルトで、1.3マイクロシーベルトから1.6マイクロシーベルトで、あとの場所は0.4マイクロシーベルトから0.7マイクロシーベルトだと思います。道路状況を確認するため、毎日小野町から広野町に通いましたが、小野町に避難していた企業団の職員2人も合流して、漏水箇所などを調べるため毎日広野町に入りました。

広野火力発電所への配水も止まっていたのですが、止めておくと東京の夏場の電力需要に持ちこたえられないので、連休明けには再開したいと依頼を受け、通水を再開するために毎日通いました。



逆境に負けないことを信じて

よしだ たかみ
吉田 隆見 さん
(広野中学校長(震災当時))

東日本大震災の当時は、福島県内公立中学校の卒業式の日でした。その日の午後、不登校生徒のミニ卒業式を終えてまもなくの大震災でしたが、45人の部活動をしていた生徒を直ちに校庭中央に避難させました。東西の校舎の継ぎ目では亀裂が入り、コンクリート片が落ちるのも目にしました。気温は低く、鉛色の空に横殴りの雪、夕方を思わせる薄暗さは、この世の終わりではとの思いが脳裏をかすめました。

保護者と連絡を取りながら、最後の生徒を引き渡したのは午後10時半ころでした。

広野中体育館は避難所となっていましたので、時間がたつにつれJR職員に誘導されて電車の乗客なども避難してきましたが、停電で暖房が使えず、校庭向かいの電気の通っていた築地地区集会所へ、私の判断で移動するよう指示しました。

それ以降、4月1日に福島工業高等専門学校の見聴覚室に広野小・中の職員室機能を立ち上げるまでは、教職員は自宅待機になっていました。生徒たちの安否・居所確認に全力を尽くすよう指示しましたが、県外に避難した生徒とはなかなか連絡が取れず、最後の1人を確認するのに2、3か月を要しました。

10月3日にいわき市立湯本第二中学校を間借りして、全校生徒20人で広野中の

再開を果たすことができ、避難生活を強いられている今、「苦しい時こそ助けあい、支えあう気持ちが大切であること」を折に触れ強調してきました。再開後、これにつながることを目指して少人数である全校生が、さらに絆を深められる行事はないものかと模索していたところ、神奈川県東日本大震災復興支援企画である「被災地の子どもたちに修学旅行を」のキャンペーンを町教育委員会から知らされ、迷わず手を挙げました。鎌倉市内の班別自主研修では、他学年の生徒とも仲良く会話したり、横浜中華街での豪華な中華料理に舌鼓を打ったりする姿を見て、実施して本当に良かったと思いました。

普段、空き教室をさらに間借りしての授業は、隣の教室の声も聞こえ、何かと不自由で窮屈な思いもあったと思います。でも、その逆境で過ごした思いや我慢は、生徒一人ひとりのその後の人生に、大きくプラスに作用するものと確信しています。

平成24年3月末の人事異動により、後ろ髪を引かれる思いで広野中を離れましたが、その年の2学期に広野中が本来の校舎に戻ったことを耳にしたときは、小躍りしたいくらいうれしい気持ちに満たされました。



お年寄りは2、3日で ノイローゼになることも

よね やま まさ ひこ
米山 正彦 さん
(広野町内の友人宅で被災)

友人宅にいるときに最初の地震がありました。その晩は自宅を片付けて寝るつもりでしたが、1回目の余震後、消防車や防災無線がけたたましく、高台の総合グラウンドに避難しました。その後保健センターに誘導され、その晩を過ごしました。翌12日の午後3時ごろ、役場の職員が回ってきて、原発が危ないと言っていました。

そのうち、東京にいる娘から連絡があり、「東京では原発が爆発した映像が出ているよ、早く避難して」といわれ、表の駐車場を見たらほとんど車はありませんでした。それでも、保健センターにはお年寄りがかかりました。運転手と保健師に逃げようと言われ、町のマイクロバス、私の車、息子の車3台に皆で乗り合わせ、いったんいわき市の方に向かい、好間のグラウンドの駐車場で合流して平田村に行きました。でも、そこはいっぱい、石川町総合体育館へ行きました。着いたのが午後11時半ぐらいで、それまで何も食べない状態でしたが、石川町の人からおにぎりをふるまわれました。

2、3日したら妻の父が「お前に家を作る。俺は友人の旅館に一生世話になる」などと変なことを言いだしました。おかしいので、15日に医師に診せました。しかし、医師からもらった薬には興奮剤が入っていたようです。16日になったら夜徘徊するようになり、17日に別の医師に診せたら、

この薬を飲ませてはいけないと言われ鎮静剤を飲ませました。その日の昼過ぎ、風呂に入りたいと言うので連れていったら、入浴後「俺、誰かに裸をカメラで撮られている」と言うのです。医者診断では、ストレス症候群ということでしたので、町の保健師にその類いの病院が福島県内にないか調べてもらいましたが、いっぱいでした。

やむなく東京にいる妻の弟に、ワンボックスの車で来てくれと頼みました。息子の友達からの情報で常磐自動車道が通れることを知り、常磐道で東京に向かいました。高速道路走行中幾度となくドアを開けようとしたので、弟が父親の前に座り行動を止めながら移動しました。それでワンボックスカーが必要だったのです。深夜やっている病院はなくまず松戸病院に行き、次に市川市の精神科のある病院に行かせました。診察の結果、即日入院になりましたが、次の日、本人はけろっとして「喉が渴いたからビールでも飲もう」などと言っていました。脱水症状を含めたノイローゼだったようで、2週間くらい入院しました。

退院後、再発防止のため借り上げ住宅を探しましたが、なかなか見つからず困っていたところ、知人が紹介してくれたアパートに落ち着くことができました。そこに父親を引き取り同居生活をしていましたが、平成26年9月4日に他界しました。



震災が 母の寿命を縮めたかもしれない

わた なべ りゅう こ
渡邊 龍子 さん
(平田村に一次避難)

平成23年3月11日はいわき市久之浜町を走行中に被災し、自宅に戻ると屋根瓦は落ち、玄関は開かずにコンクリートは地割れして、電気も水も止まりました。余震も続いていて高齢の母もいましたので、その日と次の日の夜は町内の小滝平にある親せきの家に泊まりましたが、家族は女性と子どもだけでした。男性はみんな消防団員として招集されて、弟はそのまま何か月も帰れませんでした。2日目の12日に消防団に入っているおいから原発事故のことを知らされ、翌13日に消防団長をしていた弟からも電話で広野町から離れるように言われ、おいの指示で避難を開始しました。

近所の人と一緒に避難するように指示され、親せきや近所の人たちも合流して車10台くらいになりました。最初はいわき市好間の工業団地を目指しましたが、そこも危ないと言われ国道49号線で会津まで行くことにしました。ノーマルタイヤの車とガソリンの少ない車を放置して、スタッドレスタイヤでガソリンの多い車に乗り合わせました。平田村の道の駅で仮

眠を取ろうとしましたが、そこにたまたま村の職員が来て、避難所の平田村中央公民館に案内してくれ、みんなで泊まることができました。公民館は暖房が入り、村の人たちが温かい味噌汁やたくさんの布団、毛布、母のためにマットまで用意していただき、本当に助かりました。

母は妹家族が迎えにきて、いったん東京に行ってそこから小田原の妹のところに行きましたが、その年の6月に二次避難所のいわき市ゆったり館で合流し、8月に一緒にいわき市常磐迎第一応急仮設住宅に移りました。何をするのも高齢の母と一緒に不安でした。母は応急仮設住宅に移ってから約半年後に病気になり、平成24年の8月に亡くなりました。震災が母の寿命を縮めたかもしれない、もし原発事故がなかったら、母はまだ近所の人たちとお茶を飲んだり畑仕事をして、余生を楽しんでいられたのではないかと思うと、とても残念です。

原発事故の被災者はなかなか前が見えません。前に歩けと言われてもどこに足をつけたらいいのか分からず、あたかもフワフワした綿の上を歩いているような心境です。

